

次世代の繁栄を築くソディックの底力

素材から部品、完成品に至る トータルテクノロジーが次代を拓く

鼎 談

金子 雄二社長



井水 はじめにお二人にそれぞれ就任の弁を語っていただきませう。金子社長からお願いします。

金子 私は入社以来、主に放電加工現象の研究を担当してきました。放電電源の電気、電子、コンピュータのソフトウェア、ゲートウェイ、カスタムLSI、ゲートウェイなどを専門に手がけてきました。2000年には米シリコンバレーでソディックアメリカを立ち上げ、高精度に制御できる高速NC装置を開発しました。現在のNC装置は第4世代の製品で、当時と比べて大きさは3分の1に、処理速度は10倍に向上しています。

社長に就任して、今まで以上にいろいろなところに目を配る必要があると実感しています。歴代の社長に負けないように、それ以上の結果を残せるように頑張ります。技術畑出身だけに、どうしても技術面に目が向きがちですが、それ以外の部門の社員もしっかりと受け止めていかなければならないと強く感じています。井水 技術の基礎づくりに携わってこられたですね。続いて古川事務、お願いします。

古川 私の当社の経歴は米国の販売サービス会社から始まり

ます。お客さまの加工支援を主に担当していました。日本に戻ったのは同年です。当時、当社の株価が自分たちの想定よりもかなり低く、当社が外部に正しく評価されていないのではないかと疑問がありました。そこで、もともと社員のスタートが金銭的だったこともあり、帰国後はIR（投資家向け情報提供）を担当することになりました。

その後、食品機械事業の子会社役員を経て、08年に当社の財務担当役員に就任しました。現在はグループの管理部門全般を統括しています。直接、技術開発をする立場にはありませんが、お客さまに信頼していただける製品づくりに向け、グループ内のコミュニケーションをさらに強化していきたいと考えています。

井水 お話をきかっていると、会社を内側と外側の両方から見ると、非常に良い経験が積み重なっていると感じます。ソディックは放電加工機のトップメーカーとして高い評価を得ています。同時に部品や素材の開発にも熱心で、素材から部品、完成品に至るまで幅広く手掛けるのは業界でも珍しい存在だと思います。なぜ自前でやることになったのか、背景を説明いただけますか。

金子 開発の原点は、こんな機械が欲しい、というお客さまからの要望です。社内で解決できれば良いのですが、外部から調達する部品や素材まで見直さないと性能を満たせないケースも出てきます。そうした中で、世の中になくて、必要なのは自分たちでつくると、という社風が培われました。自前での開発はお客さまの求める性能を引き出せる、有効な戦略手法と考えています。

例えばセミミックスについては、熱膨張係数が小さい特徴を生かし、耐腐食性、高絶縁性が必要な放電加工機に適した構造材として20年前から使用しています。その応用製品として0.5μm（ナノは10億分の1）刻みで移動し超精密に切削加工できるナノマシンを

活躍する若手経営陣

グループ全体の最良化を目指す

ソディックといえば放電加工機の業界トップメーカーとのイメージが強い。しかし実際はマシンングセンター（MC）をはじめ、射出成形機、食品機械など多様な産業機械を手掛けている。加えて数値制御（NC）装置、リニアモーターなどの主要部品・装置や、セラミックス、放電加工機用ワイヤ電極などの素材を独自開発しているのも強みだ。同社は6月に経営陣の若返りを実行。さらに7月にジャスダック上場の子会社であるソディックプラステックを統合するなど、次世代への飛躍に向けた転換期を迎えている。このほど社長に就任した金子雄二氏と古川健一専務に今後の経営戦略について語ってもらった。

（司会）井水 治博 日刊工業新聞社長

「自前開発」は有効な戦略

10年前に商品化した。また、機械のテーブルや軸のヘッド部分に軽量の炭素繊維を採用し、今までとは全く異なるクォリティーで切ることができる機械の開発にも取り組んでいます。現在は通常の5倍の0.5Gの加速度で加工できることが加えて進んでいます。将来は1Gの加速度で正確な切削加工を行えるようにするのが目標です。

井水 自前での開発について古川専務のお考えも聞かせてください。



古川 健一専務

タイ、洪水乗り越え新工場

井水 タイ工場の洪水は災難でした。古川 現地では10年に一度の洪水と言われているが、またすぐに起きないとも限りません。同じように、タイ工場での経験は、同じ場所でも同じことを繰り返すのはあり得ないことです。一方で、タイ工場には20年前の進出当初に採用した従業員も多く残っており、彼らの生活を考えると遠方への移転はしにくい状況にあります。機械づくりに人への依存度が高い仕事ですので、タイ工場の20年の歴史を守りつ、生産を立ち直らせるにはどうすれば良いか、そんなことを考えながら昨年12月、洪水が引いた翌週に現状確認のため現地入りしました。

工場では仮設の発電所を設置するなど、従業員総出で復旧作業を進めており、何とかしたという気持ちで、頑張っていました。そのうちで現地の社長が、今の工場があるナナコ工業団地の隣接地に、新しい工業団地の建設予定地があるので見てほしいと言われ、直線で12kmほど離れたその場所に向かいました。到着すると、その地区だけ芝生が枯れず緑が残っており、水に漬からなかったことが、目分かります。ここならすべての条件を満たせると判断し、新工場の建設を決めました。10月から大型放電加工機

〈司会〉
日刊工業新聞社社長
井水 治博

工場の建設をはじめとするその後の対応は素晴らしいと感じました。最後に、タイは成長著しい東南アジアやインドなどの中心に位置し、自由貿易協定（FTA）に積極的です。モノづくりと顧客サポートの拠点として最適な工場をフル活用して欧米や新興市場に打って出ていきたいと考えています。

井水 大変な洪水でしたが、新工場の建設をはじめとするその後の対応は素晴らしいと感じました。最後に、タイは成長著しい東南アジアやインドなどの中心に位置し、自由貿易協定（FTA）に積極的です。モノづくりと顧客サポートの拠点として最適な工場をフル活用して欧米や新興市場に打って出ていきたいと考えています。

金子 当社は本年の12月3月期が第36期でした。この機に創業時の役員の方々は退任、もしくは後方支援に回る体制に切り替えます。今後は我々第2世代で世界中のユーザーを守り、さらに増やしていく所存です。放電加工機の業界では、どんなメーカーも成し遂げられなかったアダプティブコンタクトの成功により、アーク放電のない形彫り放電加工機を自信を持って提案できます。ワイヤ放電加工機についても「スマートニア」「スマートバルス」をキーワードに使い勝手をさらに高めた商品開発を進めています。「モノづくりで困ったら、ソディックに

世界に通用する人材育成

本企業です。生産も国内が中心でした。その分、海外進出が遅れ、コスト面で厳しい状況に追い込まれてきました。販売面でも海外で独自に営業活動できるだけの体制を敷いておらず、限られたお客さまにしか機械を供給できませんでした。さらにソディックプラス

井水 多様な要素技術に支えられた製品群がいかにハイテクであるかが分かった。さて、そのソディックは7月に子会社のソディックプラスを吸収合併しました。背景や狙いをお話しいただけますか。

古川 ソディックプラスは放電加工機が高機能であるため、お客さまの大部分は日



テックは上場会社であり、独立性の観点からグループとしての活動を制約される点もありました。今回の合併により、ソディック本体の海外生産体制や販売網、基礎技術を活用し、性能面でもコスト面で競争力のある商品を開発し、市場投入できると確信しています。販売面では海外販売比率を早急に70%以上に引き上げたいと考えています。経営はもとより、生産、営業など各事業体制を直し、工作機械、産業機械、食品機械など各中国の厦門工場と蘇州工場、日本の福井事業所（福井県坂井市）で合計300台程度を生産しています。そのうち国内生産は1020台です。販売面では中国を中心としたアジア向けが50%、欧州と日本向けがそれぞれ10%、15%で、米国向けが10%弱という状況です。射出成形機は加賀事業所（石川県加賀市）をメインに厦門工場でも生産を開始し、月7080台程度を生産しています。食品機械は白山工場（石川県白山町）をメインに加賀事業所、厦門工場でも一部生産しています。

井水 現在、国内外の生産はどのような状況ですか。

古川 放電加工機はタイ工場、食品機械は中国の厦門工場と蘇州工場、日本の福井事業所（福井県坂井市）で合計300台程度を生産しています。そのうち国内生産は1020台です。販売面では中国を中心としたアジア向けが50%、欧州と日本向けがそれぞれ10%、15%で、米国向けが10%弱という状況です。射出成形機は加賀事業所（石川県加賀市）をメインに厦門工場でも生産を開始し、月7080台程度を生産しています。食品機械は白山工場（石川県白山町）をメインに加賀事業所、厦門工場でも一部生産しています。



株式会社 ソディック

本社／技術・研修センター

〒224-8522 横浜市都筑区仲町台3-12-1 TEL (045) 942-3111 (大代)